



一九九八年度所員活動報告

荒 このみ

【翻訳】

レスリー・マーモン・シルコウ著 『儀式』 講談社

【公開講演】

アフリカン・アメリカンの『パラダイス』 青山学院大学

谷川 道子

1998年はブレヒト生誕百年で、まずはその関連の仕事がいろいろ続きました。研究活動とは呼べないようなことも多いのですが、演劇研究というのは現場との連携・協力という側面も要請されますので、そういった活動の紹介という意味もこめまして。残念だったのは、その結果まとめるつもりだった「ブレヒト論」が完成しなかったことと、そして手伝っていたベルリナー・アンサンブルの『アルトゥロ・ウイ』での初来日公演が向こうの都合で「ドタ・キャン」（土壇場キャンセル）になったこと、ですが。

*世田谷パブリックシアター・レクチャー(全5回、11月)
ブレヒトの演劇世界

1月22日『第三帝国の恐怖と貧困』vs『ガリレイの生涯』

―亡命者としての介入と距離

2月26日ブレヒトvsアメリカ―資本主義の光と影

3月12日ドラマvsシアター―劇作家ブレヒトと演出家ブレヒト

*朝日新聞4月15日夕刊号「古典になったブレヒト―生誕100年に寄せて」

*10月17日日本独文学会秋季研究発表会

「ブレヒト100」シンポジウム、企画・司会

*世田谷パブリック・シアター、ソポクレス原作、ブレヒト改作『アンティゴネ』上演台本翻訳(1999年2月12～14日にドラマ・リーディングの形で宮崎真子演出、鞠谷友子主演で上演されますので、観にきてください)

*世田谷パブリック・シアター、ブレヒト『ガリレイの生涯』上演台本翻訳(1999年3月6日～3月22日に松本修演出、柄本明主演で上演されますので、これも観にきてください)

*「ブレヒト／ミュラー／ウイルソン／ドイツにおけるブレヒト受容」、PT機関誌「パブリック・シアター」第6号、特集「ブレヒトの新时代」、13～18頁所収

*松本修インタビュー「複製技術時代の演出家」、同右、38～42頁所収

*「反戦と平和への思いをこめて―ブレヒトの『子供の十字軍』」生活クラブ生協機関誌「本の花束」、11月号、5頁所収

ブレヒト関連以外では、いま編集委員をしている日本独文学会



機関誌「ドイツ文学」の103号で、「破局の予感のなかの演劇？」という総タイトルで、ドイツ現代演劇特集を企画しています。この秋に刊行予定です。他には、ハイナー・ミュラーの「ハムレットマシン」関連の仕事がいくつかありました。

*10月24日「ハムレット」と「ハムレットマシン」の間「東横短大第13回公開講座「演劇の復権―新しい表現のパラダイムをめぐって」(これは「女性文化研究所報14」に原稿が掲載予定)

*「越境／通底する演劇性―鍛肉工場の「ハムレットマシン」公演に寄せて」、鍛肉工場上演パンフ所収(10月31日の公演後にはポスト・トーク)

*「研しあうへ謎―異文化との出会いの新たな地平を拓いた鍛肉工場の「ハムレットマシン」」、図書新聞2420号14頁

最後に、我が東京外語大の総合文化研究所主催の公開講座「翻訳を語る」で、11月6日に「ドイツ戯曲の翻訳」の話を見せて頂いたのは、私にとって嬉しいことでした。

上村 忠男

前回報告を怠りましたので、一九九七年度分と一九九八年度分をまとめて報告させていただきます。

【著書】

*「バロック人ヴィーゴ」(みすず書房、一九九八年三月一三日発行)、三〇九＋V頁

*「八岩波V新・哲学講義8 歴史と終末論」(岩波書店、一九九八年)

【論文】
*「セミナー4「敗北の記憶と廃墟からの物語」(一六七―一九六頁)担当

*「唯物論と「反転する実践」―グラムシをめぐって(1)」、『批評空間』(太田出版)、第II期第一五号(一九九七年一〇月一日発行)、一〇〇―一二〇頁

*「歴史的ブロック」の概念―グラムシをめぐって(2)」、『批評空間』(太田出版)、第II期第一六号(一九九八年一月一日発行)、二六―二七二頁

*「歴史叙述と語りえぬもの―歴史のヘテロロジーのために(1)」、『思想』(岩波書店)、第八八号(一九九七年一月五日発行)、四九―六五頁

*「ハわれわれの現在Vと歴史の原・暴力―歴史のヘテロロジーのために(2)」、『思想』(岩波書店)、第八八三号(一九九八年一月五日発行)、四二―五六頁

*「事実としての歴史ということ―歴史のヘテロロジーのために(3)」、『思想』(岩波書店)、第八八五号(一九九八年三月五日発行)、一三一―四七頁

【その他】

*書評・竹内成明著「知識論のための覚書」(れんが書房新社、一

九九七年）、『週刊読書人』、第二二八〇号（一九九七年四月一日発行）

*「評議会幻想」、『現代思想』（青土社）、第二五卷第八号（一九九七年七月一日発行）、一八八—一九二頁

*共同討論上村忠男＋阪上孝＋浅田彰＋柄谷行人「ポナパルティズムをめぐる」、柄谷行人編著『シンポジウム(II)』（太田出版、一九九七年一〇月二四日発行）、二五三—二九八頁

*書評・多木浩三著『シシフォスの笑い——アンセルム・キーマーの芸術』（岩波書店、一九九七年）、『群像』（講談社）、第五二巻第一〇号（一九九七年一〇月一日発行）、三五四頁

*書評・酒井直樹著『日本思想という問題——翻訳と主体』（岩波書店、一九九七年）、『群像』（講談社）、第五二巻第一号（一九九七年一月一日発行）、三六六頁

*書評・藤井貞和著『物語の起源——フルコト論』（筑摩書房、一九九七年）、『群像』（講談社）、第五二巻第一二号（一九九七年二月二六日発行）

*対談・上村忠男＋成田龍一「新たな歴史像を求めて——一九九七年の思想界をふり返る」、『週間読書人』、第二二六号（一九九七年二月二六日発行）

*「アントニオ・ネグリのスピノザについて」、『現代思想』（青土社）、第二六巻第三号（一九九八年三月一日発行）、一六二—一六五頁

*「ヴィーコの「謎」、書標 ほんのしるべ」（ジュンク堂書店）、第二三四号（一九九八年五月五日発行）、四—五頁
*「超越と横断、あるいは言説のヘテロトピアへ」、『國文学』（學

燈社）、第四三巻第一〇号（一九九八年九月一〇日発行）、一一七頁

*「ハ木のほり男爵Vの世紀末——ウンベルト・エーコ著『永遠のファシズム』を読む」、『週刊読書人』、第二二六四号（一九九八年二月一日発行）

【翻訳】

*ガーヤートリー・チャクラヴォルティ・スピヴァク著『サバルタンは語る。ことができるか』（みすず書房、一九九八年二月十日発行）、一四五頁

水林 章

一年をふりかえって

一九九八年の最初の数ヶ月は、今年の八月に出ることになっている『週刊朝日百科・世界の文学』に一隅を与えられた「啓蒙の世紀」の責任編集・執筆にかなりの時間をとられた。中学生にもわかるようにという編集部の注文に応えることと、自分の研究のなかから生まれてきた独自の視点や成果をせひとも盛り込みたいという気持ちを両立させることに大いに苦労したのである。いくらなんでも中学生というのは誇張だろうから、少なくともこの大で学ぶ若い人たちを読者に想定して書いたのだが、分量の制限はいかんともしがたく、結局、実際に参考書として使った場合には、やはりそれぞれの文章に相当に長いコメントを加えざる



をえないだろうという気がしている。

わたしは、今日の大学の教室が、もはや自分の研究を素直に語っていればそれで済む場ではなくなっていることを痛切に感じている。かつては、学部学生に向けておこなった講義の記録がそのまま第一級の学術的書物になるというようなことがありえたが、そういう時代は完全に過去のものとなったのである。そのような折に、『週刊朝日百科』の仕事を与えられたことは、貴重とは言わぬまでも有意義な経験であった。

この仕事が一段落してから、わたしは六月の「十八世紀学会」で発表するための報告を準備しはじめた。共通論題「文芸共和国」について、フランスをフィールドにする立場から発言せよとの依頼であった。わたしの方から飛びついたテーマではないが、マルク・フュマロリの「文芸共和国」にかんする興味深い論考をはじめ、相当数の文献にあたっているうちに、十六世紀から十八世紀にかけてのフランス文学の歴史を、*public* 概念の変容を軸に再構成してみたいという気持ちが強まり、デカルトからコルネイユを経てヴォルテールにいたる文学的領野の動向を、「文芸の国家から公衆へ」という視点から見直す報告をおこなった。

学会の当日、会場におられた上村忠男教授と話ができたのはかえすがえすも幸運であった。報告を終えた後の休憩の際に、わたしは、なぜ「文芸共和国」ではなく「文芸の国家」なのか、デカルトの「方法序説」における名詞 *public* の使用法とそのラテン語訳といった問題について教授に話したのだが、学会が終わってしばらくしてから、教授は報告の内容をある雑誌に連載する手筈を整えてくださったからである。学会で発表した内容だけならば、

すぐにも活字にできる状態であったが、せっかく与えられる場である、もうすこし膨らませて「公衆」と「公論」の時代の到来を告げるヴォルテールではなく、それとは意識的に距離をとったルソーによって全体を締めくくりたいという気持ちに、わたしは捕らえられた。そうすることによって、論文の射程を「近代」に対する内在的批判のひとつの構えに触れることができるのではないかと感じたからである。別途に進行させなければならぬ仕事もいくつかあるのだが、上村教授のご厚意に応えるためにも、早急に仕上げなければならぬと思っている。

昨夏は、縁あって、南西フランスのある小都市で音楽祭を組織するという巷でいう「国際交流」的な仕事に手を染めることになった。一年を越える準備を要する無償の労働で、市当局との交渉や連絡のために書いたフランス語の文書は優に本一冊分に相当する。これは、もちろん、研究と直接的なかわりがあるわけではない。いや、それどころか、勉強の時間をかなり奪われたという気持ちが濃厚なのだが、しかし、この、時には苛立ちのゆえに投げ出したくなることもしばしばであった作業の後にずっしりと残った、フランスの社会的網の目のなかによりいっそう深く入り込んだという実感を、わたしはひとつの成果とも感じているのである。

岡村多希子

この一年間にしたこと

ここ数年 Wenceslau de Moraes にはまっています。早く手を切ってほかのことをしなければならぬと思いつながら、結局こことんつきあうことになりそうです。

2月に「ポルトガルの友へーモラエスの手紙」(彩流社)を出しました。リスボンや神戸にいる友人三人に宛てた書簡集を翻訳し詳しい解説をつけたものです。

今年のしごこの中心は、彼の代表作 O Bon-odori em Tokushima 「徳島の盆踊り」の新訳と彼の評伝のつづきです。「徳島の盆踊り」は講談社学術文庫から間もなく発行の予定です。評伝は初恋の女の部を外大論叢に掲載の予定です。これまでに発表したものを一本にまとめる準備にかかっています。

ポルトガル現代文学は今たいへん元気で、ここ数年ノーベル文学賞候補のトップにあげられています。José Saramago と António Lobo Antunes というふたりの作家がそれです。両作家とも一、二年ごとに新作を発表し、つねにヨーロッパ的注目を浴びるといったふうで、私もおおいに関心をもってこれらの作家の作品を読んでいるところです。どこかに紹介の場があればと思っています。

(上の原稿は実は昨年度の本誌のために書いたものです。早々と提出したのですが、なにかの手違いで掲載されませんでした。先日そのことをたまたま三枝さんにお話ししたところ、そのま

までいいから出してほしいとお誘いをいただいたので、以下に今年のことを書き足して出すことにしました。)

Saramago がやっとノーベル賞を受賞することになり、私もほっとしています。読んでもいない作家や作品のことを書くわけにゆきませんので、この1、2年 Saramago と Antunes の作品をメモをとりながら読むことに結構時間を費やしていたのです。Saramago はともかくとして、Antunes はたのしく読むというわけにはゆかなかったところから、これで、義務から解放された、そんな感じがしています。

ポルトガル史をからめている Saramago 作品は日本人にはわかりにくい面がありますが、数年前に発表した *Ensaio sobre a Cegueira* は、普遍的なテーマといい単純なストーリーといい、いかにも小説らしい小説で、日本人にもウケると思いますので、機会があれば翻訳してみたいと考えています。

Moraes 評伝には来年度のメセナからの助成が決まっているらしいので、来年の夏休み明けぐらいまでには仕上げるつもりで目下これに全力を注いでいます。

(98・11・28記)



アレクサンドル・ドリーリン

主要業績（一九九七～一九九八）

Красная камелия (японская фольклорная лирика эпохи Эдо)

単行本「赤い椿」(江戸時代の民謡集) 翻訳、序説、解説
サンクトペテルブルグ、ヒベリオン社、一九九七

On the Individual and Conventional in Traditional Poetry 『東京外国語大学論文集』一九九七、五五号、七四―八四頁

New Tanka Poetics: Defeating the Canon 『東京外国語大学論文集』一九九八、五六号、一〇五―一二六頁

学会

国際東方学者会議、一九九八(東方学会) 発表「近代歌論の特長」東京、一九九八、五月

Asian Studies Conference Japan (2) International Christian University. Paper<<Russian Myth in Japanese Poetry>>東京、一九九八、五月

The 50th Conference of American Association for Advancement of Slavic Studies

Paper<<Russian Culture in the Mirror of a Japanese University>> USA, Boca Raton, 1998, Sept.

三枝壽勝

一九九八年一月より二月までの仕事。

この一年も本格的な仕事はできず。だんだん仕事が軽くなっていく。原稿依頼は今年も韓国からのもの。この傾向はまだ続きそうだ。

〔単行本〕アジア理解講座―一九九六年度第3期―「韓国文学を味わう」報告書
国際交流基金アジアセンター発行、1997.12.26、190頁

〔翻訳(抄訳)〕ウン・ヒギョン「鳥の贈り物」
『アジア文学』アジア文化社、1998.3.30、154～166

〔朝鮮語〕今日の小説と小説の今日―伝統そして新しき
『二十一世紀文学』4号(一九九八秋/冬号)(1988.9)pp.84-102.

奥平龍二

1. 海外研究—一九九八年四月一日—一九九九年三月二日、英国ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院(SOAS)客員研究員、研究テーマ「ミャンマー上座仏教国家構造の研究—一八世紀の法律書マヌヂェ・ダマタツの分析を中心にして—」(国際交流基金研究助成)

2. 学会及びセミナーへの参加並びに口頭発表

(1) 一九九八年九月三日—六日(於ドイツ・ハンブルグ大学) 第二回「ヨーロッパ東南アジア学会」(EUROSEAS)への参加

(2) 九月二日—三日(於ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院(SOAS)) ミュンマ・ビルマ・ウー・ペー・マウン・ティン教授記念シンポジウムに参加。同二日、「A Serious Problem Caused by Printing of a Burmese Manuscript」と題する口頭発表

(3) 一〇月二日—四日(於北イリノイ大学ビルマ研究センター) ビルマ研究グループ主催 ビルマ研究大会に参加、同二日、「The Role of the Dharmathats or Law Books in the Theravada Buddhist State Structure with special reference to Manugye」と題する口頭発表

(4) 十一月二—四日(於ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院(SOAS)) 同学院 東南アジア研究センター 主催セミナー「Law and Politics in the Eighteenth Century Burma with special Ref

erence to the Roles of Dharmathats or Law Books」と題する口頭発表。

(5) 二月二日(於ヤンゴン ミャンマーキリスト協会) ウー・ペー・マウン・ティン生誕一一一年記念シンポジウムへの参加。

(6) 二月一六日—一八日(於ミャンマーヤンゴン 国際ビジネスセンター) 大学研究歴史センター主催「東南アジアにおける植民地後の社会と文化に関する研究大会」への参加

3. 一八—一九世紀のミャンマー資料調査及び収集

(1) 英国を中心とする欧州におけるビルマ語及び西洋語(主として英語文献)。

(2) ミャンマー(ヤンゴン及びモラミュイン)におけるビルマ語及び英語文献。

沓掛 良彦

今年度のわずかな仕事

今年春以来体調はなほだ悪く、病がちゆえ、非常勤三コマを含めて週に一〇コマの講義をこなすのが精一杯で、ガクモンもケンキュウもほとんどできなかつた。わずかに駄文、戯文を綴って藪を散じ、自ら愉しんだのみ。これでは到底エライ先生方に伍し



て、大学院ハカセ課程などで講義を担当する資格はない。「ケンキウウシヤ」（なんと官僚臭い、文部省臭い日本語だ。へどが出そうだ。こんな無神経な日本語を作ったヤツ、平気で使うヤツは信用できない）を廃業したので、遠からずエライ先生によって、ハカセ課程から追放されるであろう。それにしても近年はエライ先生が音頭を取って、やれガクモンだそれケンキウウだ、バカデミズムだと学内がやたらに喧しく、権威主義が幅をきかせているのは、滑稽でもありまた苦々しいかざりである。かと思つと、お勉強に見切りをつけたとおぼしき、学者ならぬ「学吏」のごときセンセイがおかしな活躍ぶりを見せたりして、大学というところから自由の空気が消えつつあるのは嘆かわしい。

その昔わが師は、けちな学内政治家、学内官僚のごとき学吏やからがバツコして力を振るい出した大学にあいそをつかし、「東大に文人いられず」と称して、大学教師を廃業なされた。文人を名乗る資格もない戯文の徒には、ますます「アカデミック」になりつつあるらしい西ケ原の大学は息苦しく、もはや身の置きどころもないようだ。できることなら自由の失われた大学は一日も早く辞めたいが、陶靖節先生ならぬ身は、帰るべき田園無く、恒産無く、わずかな五斗米のために大学にしがみついているなければならぬのが、なんともなさけない。ブツ、ブツ、ブツ……

一、閑人による、ガクモン的でもなくレフリー付でもない著書『讀酒詩話』を上梓。岩波書店。ヨーロッパの詩人ほかに中華飲酒詩、旅人、一休、芭蕉、大田南畝などを主に扱つてみた。木枯らしが吹きそめ、熱燗の恋しくなる頃に刊行された

のたが、あまり売れないようだ。それも当然で、酒飲みは酒の詩の本なんぞを読むよりも、そんな本を買う金があつたら、まず酒そのものを一杯でも余計飲みたくなるものである。貰えるかもしれないとちらりと聞いた、さる文学賞も結局はダメであつた。これで二度目ははずれ、やんぬるかな。二、『しにか』に一年間連載した、漢詩をめぐる戯文「古典詩の東西」の連載を終える。「衰老」に続いて「辞世」で締めくくつた。ついでに自作の辞世の句「酒に病んで夢は酒樓を駆けめぐると、辞世の歌」枯れ果てて身は塵土に還りなば、骨壺の底の辺より灰さようなら」というのを載せてもらった。ありがたい。これでいっお迎えが来ても安心だ。

三、「王朝物語二界遍歴」（中村真一郎）『王朝物語』、新潮文庫、解説）執筆。これは中村さん御自身による御指名で書いたものだが、そのゲラを御覧いただいた直後に、氏は突然亡くなられた。間に合つてよかつた。合掌。

四、「性の人工地獄」（中村真一郎）『老木に花の』論、「すばる」七月号）執筆。

五、「流謫の詩人」（木村健治訳オウイディウス）『黒海からの手紙・悲しみの歌』月報、京都大学出版会）執筆

六、これをしも「今年の仕事」に数えるべきかどうか迷うところだが、十年以上前に書き、書いたことすら忘れていたものが、突然共同執筆の本になった。『芸術学フォーラム・文学・演劇の諸相』、剋草書房、という本に「古代詩の形式」なる拙文が収められている。ただし不景気につき印税はなし、執筆者には現物一冊を支給、というありがたい結果となり、感

涙にむせている。

七、おこがましくも自らが編者となり、諸先生に執筆をお願いした女流詩人に関するエッセイ集『詩女神の娘たち』ための原稿を準備中。自分の持ち分はとうに執筆済みだが、本学の同僚の先生方を含む大先生連が、ちつとも原稿をくださらないので、大いに閉口している。

八、数年来ひきずつているイタリアの女流作家G・マグリニ『千々の秋・紫式部の生涯』の翻訳、未だ完成せず。中に出てくる「詩」を、和歌や漢詩の形で翻訳しなければならず、これがうまくゆかないので、一向に進捗しない。うんざりして、トロワイヤの『ボードレル』の翻訳に手をつけ始めた。共訳だが、やはりフランス語からの翻訳の方がずっと楽である。

中山和芳

・「ミクロネシアのビーチコーマー」、秋道智弥編『海人の世界』同文館、三二七―三四一頁。一九九八年。

・"Succession to the Chieftship in Manihiki and Rakahanga, Cook Islands", T. Kawai (ed.) "Chieftainship in Southern Oceania: Continuity and Change", *Japan-Oceanic Society for Cultural Exchanges*, pp.121-153. 1998.

川辺光

題名「外語大スポーツ100年の史的研究」報告機関 東京外国語大学・1997年度教育改善推進経費成果報告書(174頁) 共著・川辺光、東憲一

内容 本学は1999年(平成11年)4月に独立100周年を迎える。この機にあたり、外語大スポーツ100年の歩みを回顧し、その史的研究を行う。資料収集、埋もれている事実の発掘、個々の資料を一つに集め、体系化を図る。合わせて、21世紀の外語大スポーツ、教育の発展の基礎資料とする。今回は大正期に焦点を当てた。また、新たに収集した資料を加えた。

〔実践活動〕

東京外国語大学公開講座(硬式テニス対象・女子社会人)7月22日―28日 本学テニスコート)

神奈川マスタース陸上競技選手権大会(第15回記念大会)7月5日 於厚木運動公園) M60164歳 100m5位 走幅跳4位 三段跳2位

千葉マスタース陸上競技選手権大会(第17回大会)7月26日 於県陸上競技場) M60164 走幅跳1位 三段跳1位 東京マスタース陸上競技選手権大会(第16回大会)9月15日 於国立競技場) M60164 走幅跳5位 三段跳3位

全国スポーツ・レクリエーション祭マスタース陸上競技大会(10月4日―6日 於岐阜市・長良川競技場) M60164 三段跳5位



鈴木 聡

一九九八年中に発表したものとしては、『トマス・ド・クインシー著作集 第二巻』（国書刊行会）に収録した翻訳「イマーマエル・カントの最期の日々」と同巻の解説「巡回するテキスト」があります。後者は、多くの場合、書きたいことがあってもかなり短い枚数に甘んじなければならぬ身のうえからすれば満足してよい長さ（原稿用紙七〇枚程度）のものであり、ド・クインシーの生涯にわたる著作の重要な部分には触れることができたものの、それでもなおじゅうぶんではなく、フランスにおけるド・クインシーの最近の評価など、触れなければならなかった問題がいくつか残っている点が惜しまれます。ほかには、雑誌『國文學』の批評理論特集号において、酒井直樹とバーバラ・スタフォードの著書の紹介を担当しました。

出版状況の悪化（と称されるもの）の影響により、昨年原稿用紙千枚程度の翻訳を完成させたにもかかわらず、刊行は不可能になったという通告が出版社からありました。この一事によっても徴候的に表わされている通り、一九九八年は自分にとってあまりよい年ではなかったようです。きたる年こそは、なにか充実した仕事に着手する契機としたいと念じるしだいです。

松浦寿夫

本年もまた、質、量いずれの点も停滞の日々をすごし、深い悔恨にとらわれる。談話とその校正に多くの時間を費した結果が、『モデルニテ、3×3』（思潮社、小林康夫、松浦寿輝との共著）であり、また同じ三人での

「パリは二〇世紀をどう生きたか」（『建築文化』、一九九九年一月号）

がある。他に、

「二〇一年の筆触」（鈴木了二と。『Sagi Times』、一号、一九九八年五月）

「ミスと不可視なもの」をめぐって（岡崎乾二郎、鈴木了二、田中純と。『建築文化』、一九九八年二月号）

がある。論文としては、

「ガラスの国の独身者、さえもIII上演、あるいは舞台上のミス」（『建築文化』、一九九八年二月号）

「フランシス・ベーコン」（小林康夫、建島哲編、『現代アート入門』、平凡社、収録）

「平面性のデーモン」（『武蔵野美術』、一一〇号、一九九八年十月）

があるのみ。短文としては、

「デュシャンと画家たち」、及び、「贋金つかい」（『美術手帖』、一九九八年八月号）「トリスタン・ツァラ邸」、及び、「サントル・ジオルジュ・ポンピドウ」（『建築文化』、一九九九年一月号）

「ピエール・フランカステル」、及び、「一九六八年五月」(「フランス哲学・思想辞典」、近刊)

なお、絵画作品の発表は、「Each Artist, Each Moment 1998」展(東京、銀座、ギャラリー GAN、三月十六日～四月十一日)に五点を出品。

宇戸清治

著書

・「タイ文学を味わう」、国際交流基金アジアセンター、四月、研究ノート

・「滝」における幻視のメタファー・カノックポンの世界」『東京外大東南アジア学』第三号、三月。

翻訳(雑誌)

・「クンチャーン・クンペーン物語(一)」プレームセーリー本『東南アジア文学』第五・六合併号(東南アジア文学会)、一月。

・「クンチャーン・クンペーン物語(二)」プレームセーリー本『東南アジア文学』第七号(東南アジア文学会)、四月。

・「クンチャーン・クンペーン物語(三)」プレームセーリー本『東南アジア文学』第八号(東南アジア文学会)、七月。

・「軍鶏」ワーニット・チャルンキットアナン作『アジア文学』第四号(アジア文化社)、一月。

百科事典項目執筆

・弘文堂『歴史学事典』(第七巻『戦争と外交』中、「ピチャイ」

シンクラーム・タイの「戦勝宝典」を執筆)二月刊行予定。
エッセイ・その他

・「一九九八年度東南アジア文学賞」受賞者レカムとそのプロフィール」『東南アジア文学』第八号(東南アジア文学会)七月。

・「タイの小説が面白くなってきた」日本語に訳されたタイ小説一覧」『恋するアジア』第十四号(アジアライフ社)五月。

藤井 守男

「イスラーム神秘主義聖者列伝(抄訳)」(アッタール)国書刊行会、一九九八年六月

ペルシア語の神秘主義文献研究の一貫として、二年程前から進めてきたものだが、このペルシアのテキスト自体に問題がかなりあることが、翻訳の過程でも認識された。より厳密な校訂を経たテキストに基づく翻訳が再度必要になるうと思われる。(尚、一九九八年一〇月に、国際交流基金のフェロー(日本での研究協力者)ホストは、藤井が担当)として来日された、テヘラン大学のシャファイイー・キヤドキャニー教授は、この分野での世界的権威で、現在、特に、アッタールの詩集の校訂に取り組まれておられるが、将来的には、このテキストの校訂に着手する可能性も示唆されている。)



村尾誠一

本年は論文が一本も活字になっていないのでお恥ずかしい限りである。現在最も主要な課題として進めている二条為世に関する研究がやや停滞していて、来年には何とか打開しなくてはと念じている。久保田淳氏を中心に編集している『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店）の仕事が大詰めで、初夏には出版の予定である。歌語・歌枕について集中的に考えたのは収穫だったと思う。数年來進めている最後の勅撰和歌集である新統古今集の注釈もそろそろ決着をつけなくてはならない。その伝本の調査で夏に天理図書館を訪れ、ついでに古寺を歩き、かねて興味を抱いていた殷富門院大輔という中世女流歌人の南都巡礼に関する論文を書いた。近々『論集』でお目にかけることになろう。雑誌『国文学』の「学界時評」、雑誌『月刊国語教育』の連載などは続いている。講師を務めている所沢市民の自主講座で、五月に真言声明のレクチャーコンサートを開催したのも楽しい経験だった。

柴田勝二

〈論文など〉

- ・「Yの記憶―『地獄変』再論」（『山口国文』第二二号、一一四～一二三頁）
- ・「大阪言葉と文学―谷崎潤一郎『卍』をめぐって」（『東京外国語』

大学「日本研究教育年報」（一九九七年度）、一三三～一四三頁）

- ・「優雅の行方―三島由紀夫『春の雪』論」（『日本文学』一九九八年九月号、四〇～五二頁）
- ・「模倣する行動―三島由紀夫『奔馬』論」（『近代文学論集』第二四号、一一一～一二三頁）

〈その他―共著〉

- ・日本文学研究論文集成『大江健三郎』（若草書房、一九九八・三）のうち「地上への回帰―女性のヴィジョン」（二〇六～二二六頁、「敍説」V、一九九二・一、の再録）。

栗田博之

論文：Who Manages Disputes? Introduced Courts among the Fasu,

Papua New Guinea

元々は一九八六年に書いた論文だが、紆余曲折があつて（出版計画がつぶれたり、延び延びになったりして）、一二年ぶりにようやく日の目を見ることになった。データ自体は既に古いものとなつてしまつたが、論旨は古びていないというのが、唯一の救いであり、誇りである。

・翻訳・ペイトソン「ナベン」

昨年そのまま、全く手をつけることが出来ず。いつになつたら完成稿になるのやら、全く見当が付かない。大学や学会の

雑務が多過ぎる！

岩崎 務

論文は、本誌昨年度号ですでに予告の通り、西洋古典学会での発表をもとにした「予言詩人としてのティブッルス」第2巻第5歌に描かれるローマー」が三月に学会誌に掲載されました。

ギリシア文学に比べてわが国への紹介が遅れてきたラテン文学ですが、最近になって邦訳の企画が相次ぎ、翻訳の仕事が多くなりました。現在、キケローの『トゥスクルム荘対談集』と『最高の善と最大の悪について』（いずれも共訳）、プラウトゥスの喜劇『メナエクス兄弟』を翻訳中で、今年はこのが主な活動となりました。よく進捗したとは言えませんが、もう何年も前に依頼を受けたものもあり、まずはキケローの両作品を来年度に上梓することを目指しています。

真鍋 求

運動のピッチ変化による運動効率や換気性作業閾値 (Ventilation Threshold: VTと略称する) の変化について、千葉大学教育学部スポーツ科学研究室との共同研究を行っている。これまでその場ステップ運動や自転車こぎ運動において、ピッチを変化させると、運動時の効率やVTの絶対値が異なることを報告

してきた。本年は特に自転車漕ぎ運動のピッチ変化についてさらに詳細な実験を行った。

運動時の酸素摂取に関する研究は、最大運動負荷による最大酸素摂取量を中心に展開し、現在でも競技力向上等に関係する見解に貢献している。一方、近年、最大下の運動負荷で得られるVTの測定法が確立し、有酸素運動と無酸素運動を区別するための客観的な指標としてエアロビック・エクササイズの指導やリハビリテーション等の現場などでも着目されている。

VTやVO₂は運動様式により異なることが早くから指摘されてきた。そこで我々はその場ステップ運動や自転車こぎ運動において、同じ運動様式でもピッチを変化させると、運動時の効率やVTの絶対値が異なることを指摘してきた。この理由の一つとして運動時に生じる筋のポンピング作用、すなわち筋組織内静脈のリズミカルな機械的圧迫による心臓還流の増加作用が、心収縮のタイミングにより変化し、心拍出量に影響していることが考えられる。このことは運動のピッチと心拍数の一致が起るとき血液還流量が効果的に増大し、酸素摂取量の効率的な増大が現れることを予想させるものである。これらの関係を詳細に検討することによって、種々の運動、特に有酸素運動においてより安全で効率的なトレーニング方法を提案できると期待している。



加藤雄二

本年度は昨年度のウイリアム・フォークナー生誕百周年について、日本フォークナー協会が設立されたという事情があり、ウイリアム・フォークナーの研究に終始した。具体的には10月なかばに広島大学で開催されたフォークナー協会第一回大会でのシンポジウム、「フォークナーと世界文学」に主に若手研究者たちとともに参加し、シンポジウムのテーマにあわせて「フォークナー―転位の諸相」というタイトルで、ウイリアム・フォークナーと南米作家ガブリエル・ガルシア・マルケスの影響関係を論じた。多作とは言えない私が専門のアメリカ文学プロパーではない議論を昨年今年と続けているせいかな、話題じたいに多少の疲労感を持つうえに肉体的な疲労が重なり、辛い一年だったと（本人は）感じているけれども、それはテーマの大きさゆえの疲労だったのかもしれない。周知のとおり、中上健次が他の多くの日本人作家と同様にウイリアム・フォークナーの「影響」を受けており、彼のフォークナーについての有名なエッセイ「繁茂する南」は、謎めいていると同時に多くの研究者たちの興味をひくコメントになっていった。その「南」の特質をフォークナー、ガルシア・マルケス、そして中上は引き継いでいると中上自身がかつて語ったことがあったが、それをアカデミックに語ってみることは可能なのか？とありあえずは、限られた長さの議論でそれを試みたつもりだった。

1992年のバブル経済崩壊とほぼ時を同じくして、日本は安

部公房、中上健次をあいついで失い、大江健三郎がノーベル文学賞を受賞して、それ以前の（戦後）文学のパラダイムが終わりではないにしても「断絶」を迎えたという意識は、ことなつた言葉でその意識を表現する多くの文学研究者たちに共有されているだろう。広島でのシンポジウムでも、バブル経済期にはありえなかった「戦後」という議論が他の研究者によって加藤典洋の「敗戦後論」からの引用とともに提出されてもいた。加藤典洋は「青春文学」のアメリカにおける旗手とされてきたかに思われる。D・サリンジャーが、実は「戦争文学」の書き手だったのでないかという視点が（実は以前にもあったのだが、ほとんど一般に知られてはいなかったように思われる）提示し、太宰治とならべて論じている。そうした風潮が経済状況と相関して必然的に起きてくるかのように思われること自体はバブル期にバブル文学（アメリカならば1920年代など）が流行つたのと同様、それほど重要さは持たないようにも思われるのだが、論じることになるとも思わずにいた中上の作品をあらためて読み直し、シンポジウム終了後その重要さを再認識した。シンポジウムでの発表に変更を加えた原稿「繁茂する南」とウイリアム・フォークナー、ガブリエル・ガルシア・マルケス」はその後、フォークナー協会編集の雑誌「フォークナー」（松柏社）に変更を加えて掲載され、英語版をインターネットで海外に流す予定。自分を「日本」の文学研究者だとくに考えることはあまりないけれども、今回は中心のテーマではなかつた中上とフォークナーの関係について議論を深めることには興味を持った。

伊藤英人

学会発表

『華語類抄』*wa rahan'ie* (『華語類抄』について), 1998年11月8日、朝鮮語研究会第149、150回記念大会(要旨集一八三・二〇二頁)

櫻尾直樹

論文

1999 「宗教的接続可能性の基礎概念—新宗教の『民俗性』に関する宗教民俗学的一考察—」, 宮家準先生退職記念論文集『民俗宗教の諸相』, 春秋社, 3月刊行予定

1999 (avec Jean-Pierre BERTHON)

“Nouvelles voies spirituelles au Japon contemporain : etat des lieux et mutation de la religiosite”, Archives de Sciences Sociales des Religions, forthcoming.

学会発表

1998 “The Actual Controversy on the New Religions in Japan”, International Sociological Association, XIVth World Congress of Sociology, Universite de Quebec a Montreal, Canada.

書評

1998 ケン・ウイルバー著『進化の構造』, 春秋社, 一九九八年、産経新聞、六月二七日

1998 島蘭進・石井研士編著『消費される宗教』, 春秋社, 一九九六年、『宗教研究』317, 一六一・七頁。

1998 山田太一・福田和也著『何が終わり、何が始まっているのか』, PHP, 一九九八年、産経新聞、八月二十九日。

1998 ダグラス・ラミス著『ラディカル・デモクラシー』, 岩波書店, 一九九八年、産経新聞、一月八日。

講演

1998 “Nouvelles religions japonaises transfrontalieres”, Ecole des hautes etudes en science sociale, le 4 fevrier 1998.

1998 「日本宗教の自然と霊性—ヨーロッパ、特にフランスとの比較から—」(國學院大學日本文化研究所公開講座、

「日本文化を知る講座・世界のなかの日本の自然観」、一〇月一七日)、『國學院大學日本文化研究所報』。

評論

1998 「プロジェクト2000」、国際宗教研究所編『教育のなかの宗教』, 新書館, 一九九八年、二六四・七頁。

岡田 知子

・論文

『魔物の島』に関する一考察—作家ヴァンディ・カオンの見たカンボジア現代史—『東外大東南アジア学』第4巻, 31—



48頁

「1980年代の社会主義政権下におけるカンボジア現代文学
—民心獲得を狙った政治宣伝の道具—」『慶應義塾大学言語文
化研究所紀要』第30号

・翻訳

「僕に命令しておくれ」『東南アジア文学』第7号、3—13頁
「変わりゆくもの」『東南アジア文学』第9号掲載予定

・口頭発表

「カンボジア現代文学の流れ」日本クメール学研究会、上智大
学、一九九八年十二月十一日

関口時正

・公開講座を担当してみた

正直に言って、何を話してよいのかわからぬまま当日にのぞ
きました。他の先生方の講義に出席していれば、そういうことにな
らなかったのかも知れませんが、金曜日には自分の授業がない
こともあって、気持ちはあってもついつい怠け心のうち勝てず、
大学に出かけませんでした。結果として、受講者の皆さんが知り
たい、聞きたいと思っただけで、結果として、受講者の皆さんが知
りたかったのではないかと不安が残っています。

岩崎 稔

著作（共著）

1「忘却のための『国民の物語』—『来歴論』の来歴を考える」
（共著『ナショナル・ヒストリーを越えて』、小森陽一、高橋哲
哉編、東京大学出版会、1998年、総頁数327頁のうち
175頁から193まで）

論文

- 1「モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』論」(1)(2)
- 2「『未来』1998年2月号 No377、二〇—二五頁および3月
号 No379、九—一五頁 所収、未来社
- 3「『未来』1998年5月号 No380、二—八頁および6月号 No
381、九—一五頁所収、未来社」
- 4「『未来』1998年7月号 No382、一八—二四頁および8月
号 No383、二—二八頁、所収、未来社」
- 5「『未来』1998年9月号 No384、一四—二〇頁および1
0月号 No344 5、三四—三九所収、未来社」
- 6「『忘却の功用』論、あるいはニーチェについて」(1)
- 7「『未来』1998年12月号 No387、一四—二〇所収、未来
社」

書評、時評等。

- 1) 対談「メディア都市の地政学」をめぐって」
(田中純氏と。『10+1』1998年春季号所収、メディアデザイン研究所)
- 2) 「ユダヤ人絶滅政策の全貌」
(ラウル・ヒルグルバー著『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』柏書房、1997年に対する書評論文、『図書新聞』1998年4月11日号)。
- 3) 「アムネーシアの不安」
(『月刊言語』大修館書店、1998年9月号、第27巻9号、6-7頁所収)。
- 4) 「歴史はいかに語られるか」
(シンポジウム記録、『立命館言語文化研究』1998年巻第4号所収、340頁から344頁まで担当)。
- 5) 「週間読書人」1998年1月16日号、『シンポジウム2』浅田彰、柄谷行人編、太田出版、1997年。
- 6) 「週間読書人」1998年7月24日号、『歴史とは何か』田崎英明、細見和之、崎山政毅著、河出書房新社、1998年。
- 7) 「東京新聞」1998年9月27日号、『カフェ・ヨーロッパ』スラヴァンカ・ドラクリッチ著、長場真砂子訳、恒文社、1998年。
- 8) 「グローバル化と国民国家への問い」『世界』別冊「この本を読もう！書評の森97-98」所収、岩波書店、1998年、132-135頁。
- 9) 「いち押しガイド99」1998年、『故郷という物語』成田

龍一、吉川弘文館、1998年他。

- 10) 「国民国家と記憶の語りをめぐって」『週間読書人』1998年12月25日年末回顧総特集号、本橋哲也、田崎英明氏との鼎談。

学会報告

- 「国民国家論と責任論のパラドクス」、1998年度日本倫理学会・全体シンポジウム『責任と倫理』における報告。

西永良成

・著書

- 『ミラン・クンデラの思想』平凡社、一九九八年六月
『変貌するフランス—個人・社会・国家』日本放送出版協会、一九九八年十一月
『超』フランス語入門』中央公論社、ハ中公新書V、一九九八年十一月

・訳書

- ポール・ヴェーヌ『詩におけるルネ・シャール』法政大学出版局、一九九八年十二月

・論文

- 「亡命作家の孤独な戦い—ミラン・クンデラの場合」(中嶋嶺雄編『変貌する現代世界を読み解く言葉』国際書院、一九九七年二月刊)



・翻訳論文

アンドレ・グリユックスマン「悲劇のアルジェリアを歩く」
△中央公論▽一九九八年五月号

・書評・エッセー

「緩やかさと軽やかさ」Ph・ソレルス『ルーヴルの騎手』（菅野昭正訳、集英社）書評 △すばる▽一九九八年六月号

「ふたつのベストセラー」△月刊百科▽一九九八年一〇月号

「ミラン・クンデラの小説的モラル」△読売新聞▽一九九八年一二月二二日付夕刊

岡田和行

論文

「D・ナツアグドルジの短編小説『お坊さまの涙』の人間像の問題について（モンゴル語）」「金鑰匙」誌、第二号（通七四号）、呼和浩特、一九九八年六月、四六一―五四頁。

その他

「モンゴル——時間的、空間的な広がり、に圧倒される」『アエラムック（アジア学のみかた。）、第三三号、一九九八年一月二〇日、一六一―一七頁。

「第七回国際モンゴル学者大会（一九九七年八月二一―一五日）第三部会（文学・芸術・文化）報告」『日本モンゴル学会紀要』、第二八号、一九九八年三月二日、一五一―一五二頁。

ウティン・ブンニャウオン

・一九九八年十一月

「ラオスの祭り」と芸術について『山の民と海の民の芸能』ラオスと沖繩に見る東南アジアの民族交流』五四―五八頁、（財）兵庫現代芸術劇場

・一九九八年十二月

‘thotsaphit raatsatham’ (‘Traditional ten Commandment of the Ruler’) ‘Sieng Khean News Paper’, p.1. State Printing House

・一九九八年六月二日

「ラオス文学に見る仏教」国際交流基金アジア理解講座第三回『東南アジア実践仏教の姿』で講演。

亀山郁夫

*著書

『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房、九月）―木村彰一賞受賞
*訳書

S・セミョーノヴァ『フォードロフ伝』（共訳、水声社、三月）
*エッセー

「世捨て人」の楽園としてのシベリア（毎日新聞、二月二五日）

夕刊) / 二〇世紀ロシアの「宿命の女」(毎日新聞、五月六日夕刊) / 無動機殺人を重ねる「現代の英雄」(毎日新聞、七月八日夕刊) / アナーキー都市の異端者たち(毎日新聞、九月九日) / 「内なる闇」と死の予感(毎日新聞、十一月一八日夕刊)

*書評

ウグレシイチ 『バルカン・ブルース』(『世界』一二月)

クラスコーワ 『クレムリンの子どもたち』(週間読書人、一二月一八日)

書評

スーフィズム研究動向研究会・聖者信仰研究会
1998年度合同研究合宿

フジタヴァンテ編・奥平龍二監修

『ミャンマー』【慈しみの文化と伝統】

東大総合文化研究所『総合文化』第1号

石井和子

論文

「古代ジャワにおけるシヴァ教と仏教の共存」

東大A A研「共存・共生」プロジェクト論文集(印刷中)

学会・研究会発表

「インドネシアのパンチャシラ第一原則考―「唯一なる神性」の時空性―」

東大A A研プロジェクト「東南アジアにとって20世紀とは何か」

「パンチャシラの「唯一なる神性」について」

第29回日本インドネシア学会

「概説イスラーム化以前のジャワ―古代ジャワのシヴァ教と仏教―」